

マユマ

-It's happy days-

応龍の共存



『応龍の共存』

応龍は夜を好み、ときどきふらりと深夜に出かける。

応龍にとって人の姿をとることに、違和感はない。封印される前から、人が多くいる地に入ることも多かったから今の姿を窮屈に感じることもない。だからといって人が多いことを好んでいるわけでもない。

人のいない野山の方が、太転依として馴染む。だから人の気配の少ない夜に好んで出かけている。

と、応龍は、以前アメリカに語ってみせた。

応龍にとっては、その通りなのだろう。だが、実際はそれだけではなかった。

ある日の夜。天の川がはっきりと見える快晴の夜空の下、応龍は街道を歩く。一方の手をポケットに入れ、もう一方を胸の前に掲げるようにして歩き、町中を流れる川の前で立ち止まった。歩みを止めた応龍の手から、ふわふわと川へ向けて太転依が降りていく。

「もうあんなところに、入り込むんじゃねエぞ」

応龍の声に、川に降りた太転依がお礼を言った。

その太転依は、下水道にハマりこんで弱っていたところを応龍に助けられたのだ。

ひとしきり、礼を言う太転依に背を向け、応龍は再び夜の散歩へと繰り出す。

人と太転依が混じり暮らす葦原町に、トラブルは耐えない。これが人の少ない野山なら、楽なんだがなんと応龍は一人つぶやく。

人が増えて人の世が広く行き渡っている現代に、応龍の悩みの種は尽きない。管理された街と人々の暮らしに、自然体である太転依は影響力がありすぎる。いつそのこと、もう一度綺久羅美に封印されるのも悪くない。

そんなことを思い、笑みを浮かべる。まさか自分がそんな考えを持つとはと、半ば呆れる。

「オレもヤキが回ったな」

ふと立ち止まって感傷にふける応龍はタバコを口にくわえた。携帯灰皿を用意したところで、あたりに漂う酒の匂いに気づく。

「ん？ こいつは……」

匂いの方の方に視線をやると、屋台の飲み屋があった。しばらく前から、その屋台はよくそこにあつた記憶がある。だか匂いに気づいたのは今夜が初めてだった。

らしくもない感傷にふけていたからかもと、苦笑を浮かべた。

たまには飲むのもいいかもしれない。そう思い、近づく。

うるさい先客が二人ほどいるが、酒の香りの誘惑には勝てず、ふらりとのれんをくぐり、空いている椅子に腰をかけた。

「おい。酒をくれ」

ぶつきらばうな要求に、屋台の主人もぶつきらばうに応え、なみなみと注いだコップ酒を渡される。

応龍は酒をこぼすことなく口元へと運んだ。

「……こいつはいい匂いだ。おやじ、どこの酒だ？」

この酒が造られた土地に行けば、いい神気が味わえそうだと思わず質問した。
その応龍の声に、先客が反応した。

「おや？ キミは……」

聞き覚えのある声に、応龍はコップのふちに口もつけずに振り向く。

呼びかける声の主は泉戸裕理の父、裕導だった。

そして彼の隣に座るのはアメリカの父、河合玄造だ。

「ヨリトモ君じゃないか」

夜の散歩は、思いがけない出会いがあるようだった。

これは巡り合わせと呼んでもいいかもしれない。

この二人の飲んだくれ中年との出会いが、応龍にとって思いがけないきっかけとなった。

明くる日の午前中。応龍はアメリカに話したいことがあったので、河合家に入っていた。そしてリビングに入ったところで、アメリカが家にいないことに気づく。今日はどうやら早くに学校へ行ったらしい。少し精神を研ぎ澄ませると、すでに創聖学院にいるのが分かった。それならば、帰ってくるのを待とうと思い、池に戻ろうとしたところで気づいてしまった。シンクの中に、汚れた食器やフライパンがあることに気づいてしまった。

「あいつ……食事をしたら、ちゃんと洗ってけよ、ツたく」

ジャケットを脱いで、ワイシャツの袖をまくりあげ、エプロンをし、台所用洗剤が植物油脂であることを確認した後、食器を洗い始める。洗い終わったものを乾いた布巾で水垢がつかないようにしっかりと拭き、食器棚にしまう。何度も同じことをしている応龍は、すでに収納場所を覚えていた。

一通り片づけてエプロンを脱いだところで、リビングの椅子に見慣れないものを発見した。小さな巾着袋だ。座面にちょこんと置いてあって、ほのかに食べ物の匂いがする。応龍はアメリカが作った弁当と判断した。

「あいつ、自分で作っておいて、忘れやがったな……」

普段は弁当なんて作らないことは知っている。今日は何があったのか、わざわざこしらえたようだ。せっかく作ったのに、忘れるとはバカな女だな。いつもぎゃーぎゃー騒いでるから、こういう時に物忘れがひどくなるんだ。と思いながら、応龍は弁当を持って河合家を出た。

目指すは創聖学院のスライトリード。

創聖学院に入ったところで、学生の一人に声をかけられた。

「あつ。ヨリトモさん！ お久しぶりっす」

以前、太転依の起こした自動車事故に巻き込まれ、怪我をした少年だった。彼は怪我をした時、応龍に病院まで運んでもらったおかげで一命を取り留めた。だから命の恩人である応龍を見る視線にも、自然と尊敬の色が濃く出ている。

「よお。お前、この学生だったか」

「はい。あの時はどうもお世話になりました」

「いちいち昔のことを掘り返すなよ。ところでアメリの教室はどこ分かるか？」

「アメリ？ ……あ、そうか。河合アメリ先輩ですね、河合理事のお嬢様の。有名人ですからね、知っているっす。たしかカリキュラムSだから、あっちの校舎っす」

「そうか、あんがとよ。体の調子はどうだ？」

「もう全快っす」

「そりや良かった。もう無茶すんなよ」

ぶつきらばうに答える応龍に、少年はさらに尊敬の念を込めた視線を向けてくる。いたたまれなくなった応龍は背中を向けて、少年が教えてくれた校舎の方へと歩き始めた。

アメリを見つけた応龍は、おいと声をかけて、弁当の入った巾着袋をかかげた。

「あ、ヨリトモ。え？ わざわざ届けてくれたの？ うわー助かる。今日、食堂が使えないからわざわざ作ったのよ」

「だったら忘れんな。お前はヌケてんだよ」

「はいはい。忘れないようにします」

「つたく……じゃあな」

応龍はお弁当の入った巾着をアメリに手渡し、立ち去る。いつもの、そっけないヨリトモの態度を前に、アメリもいつものように何事もなかったかのように友達の輪に戻ろうとした。

だが、アメリはふと立ち止まって振り返る。

振り返った先に、応龍の姿はなかった。

アメリは、違和感を感じていた。

確かに、何度か忘れ物を届けにきてくれたことはある。

でも、たかが弁当くらいで、届けてくれたことはあっただろうか？

「どうしたんだろう？ いつもより優しいなあ」

疑問を口にした直後、友達に呼ばれて食事の輪に戻った。他愛ない話をしてる間に、その疑問は頭から離れてしまった。

校舎を出た応龍は、創聖学院のグラウンドまで足を伸ばした。そこで一服しようと思ったのだ。しかしその前に、知った気配に気づいた。

「……童^{わっば}か」

フロアレスという鶴とましろがいる方へ意識を向けると、門の前に鶴と美冬がいることに気づいた。

「鶴。千円だ」

「おお。夏目さんじゃ。これで足りるのか？」

「足りるはずだ。おつりは好きに使っていいぞ。それで本当に一人で行くのか？ 私がついて行かなくて大丈夫か？」

「大丈夫じゃ。美冬は授業があるじゃろ。学生の自分は勉強じゃ。しっかりな」
につこり笑顔の鶴に諭され、美冬は苦笑している。

それから背を向けて出ていく鶴を、心配そうに見つめている。

応龍は鶴に気取られぬように、美冬から遠く離れた後で、彼女に近づいた。

「おい、その女」

「え……あ、応龍か？ どうしたんだ突然現れて……ましろか？」

「ああ？ 綺久羅美に用事なんてねえよ。で、童はどこへ行く？」

うむを言わさぬ応龍の問いに、美冬は多少戸惑っている様子だった。応龍も、そういえばこいつとは、あまり話したことはなかったなと思った。

「お前のところを出ていったのか？」

「え？ いやまさか。買い物だよ」

「あいつをパシリに使えるのか？」

感心しかける応龍だが、美冬は慌てて首を横にふる。

「それこそまさかだ。外に買い物に行きたいというのでな。鵜が遊びで使っている千代紙を買ってきてくれと頼んでみたんだ」

「買い物……童がか。へえ……」

「フロ雷斯にいれば、必要なものはほとんど手に入る。だが、買い物そのものがしたいというのでな……」

美冬が困った様子で溜息をついて言う。

「何事も無ければ良いが……いくら長生きとはいえ、鵜は無邪気すぎる」

「そうだな、ニンゲン様に迷惑をかけるかもなあ」

皮肉のつもりで言った言葉に、美冬は真摯に答えた。

「それもあるが……あの子は自分で思っている以上に心が傷つきやすいんだ」

「……………」

「だからあまり一人にしたいくない……これは、過保護かな」

「……さあな」

休憩時間終了のチャイムが鳴る前に、美冬はフロ雷斯に戻っていった。

応龍はしばらく去っていく美冬の背中を見つめ、それから立ち去る。

鵜と同じく、創聖学院から歩いて出ていった。鵜の後をつけるように。

鵜は大きな瞳をくりくりさせて辺りを見回す。面白そうなものは無いかと探している目だ。応龍は何かやらかしそうだと溜息をついた。

拾った木の棒を楽しそうに振り回したり、ファーストフード店前のマスコットの前に立ってじつと見ていたり、横断歩道の押しボタンを何度も押してみたりと、好き勝手に歩き回っているが、許容範囲内だった。

「あいつ……どこに買いにいくなだ？」

鵜は、興味あるものが視界に入るとその側へ近寄っていく。気ままに何度も繰り返す。あまりにも無軌道で、どこに行くのか分からない。

そして、鵜が通りかった老婆に道を聞いた時だった。

「おいその娘。千代紙が売っている店を教えるのじゃ」

買う場所も知らずにうろついていたのかと、突っ込みたくなるが我慢する。

老婆は駅前にある大型の本屋を教え、鵜は駅の方へと向かい始めた。今まで歩いていた方向とは正反対だった。

しばらくは駅前へと向かっていた鵜だが、子どもの嬌声がする方へと道を変えた。そこは公園

に隣接した駄菓子屋だった。目を輝かせた鶴はそこへ直行する。

「おつ。おとおお……可愛いおもちゃが沢山じゃ……おいその少年。この夏目さんでこのカエルのおもちゃは買えるのか？」

古いゲーム機をのぞき込んでいた子どもに話しかけると、その子は「よーだよ」と応えたので、買ってしまう。それから公園で遊び始める。

「おおお。カエルのように動くのお。人間にはなかなか上手い細工じゃ」

「そいつ水場でも泳ぐんだぜ」

「なぬ？ それは本当か少年」

「こつち来てみるよっ」

鶴は少年につれられて、公園の壊れた噴水のところで遊び始める。

「おおおつ。本当じゃ。こいつ泳ぐ」

「だろっ」

しばらくカエルのおもちゃで遊んだ後、鶴は他にもビー玉やおはじきを買う。こつちの方が面白いというすすめに従って、指から煙が出る紙も買って遊ぶ。竹とんぼを買おうとすると、こつちの方がよく飛ぶとゴムで飛ばす飛行機を買って遊ぶ。

このまま遊び倒しそうだなと思った応龍は、気配を消さずに鶴に近づいた。それでも鶴は気づかずに、飛行機で遊びまわっている。

周りが見えてなさすぎると溜息をついた。

「おい童^{わっぱ}」

「あ、蛇モドキ。こんなところでどうしたんじゃ？」

まさか後を付けてきたとは言えないから、質問を質問で返した。

「お前こそ、こんなところで何してんだ？」

「わしは……えつと……そうじゃ買い物じゃ。美冬に頼まれて買い物に来ている」

今、一瞬買い物のことを忘れてたぞ、と思ったが知らないことになっているので応龍は言わない。だがどうしてもカエルのおもちゃを左手に、飛行機を飛ばすゴムを右手に持つ姿を白い目で見てしまう。

「そのくだらねエおもちゃが、頼まれたものか？」

「そ、そうじゃ。美冬が遊びたいと言うのでな」

あの美冬がカエルのおもちゃで遊ぶイメージが湧かない。

「だがそろそろ行かねばならない。まだ買うものがあるのだな」

鶴と一緒に遊んでいた少年に、またなと挨拶をして公園を去っていく。

方向も間違えず、駅の方へと向かっていった。

応龍は再び、鶴の後を追った。

駅前へたどり着き、大型の文具店を見つけた鶴は、意気揚々と中へ入っていった。

しばらくして出てきた鶴は、しょんぼりしていた。手には今まで持っていたおもちゃしか持っていない。

「足りなかった……駄菓子屋で使い込んだばかりに……」

応龍は、自業自得だなと溜息をつく。

とぼとぼと歩き出す鶴は、寂しそうに肩を落として帰路につく。往路はあれほど楽しげだったのに、見る影もない。

「どうしよう……美冬に頼まれたのに……」

悲しそうにうなだれている様子を見て、美冬の言っていた傷つきやすいというのは本当かもしれない。応龍はそう思えてきた。

昔の鶴なら、金で買えないなら盗んでやれくらいのこと、してみせただろう。美冬と接することとで鶴が変わってきているのは間違いない。

「……これも全てあの少年がわしの金を駄菓子屋さんで使わせたからじゃ。仕返ししてやるっ」

「おいこら童^{わっほ}」

思わずツツコミを入れて、応龍は近づいた。

「おおっ、蛇モドキ。丁度いいところに現れおった。金を貸してくれ」

パツと笑顔になる鶴の前に、応龍は盛大に溜息をついてみせた。

「金、無いのか？」

「無い。千代紙買えなかった。だからほれ、貸してくれ」

「そんなの買ってるから無くなんだよ……これでいいか？」

「おおっ。夏目さんなら大丈夫じゃ」

応龍は財布から千円を出す、満面の笑みで受け取ろうとした鶴の手から、すつと退く。

「なっ。くれないのか？ いじわるじゃぞ。いじわるは良くないと美冬も言っておった」

「質問に答える。何故盗まなかった？」

「は？ 盗む？ わしはいい子じゃぞ？ そんなことせんわい」

鶴が手をにゅつと伸ばして千円をかつさらい、にこりとした。

「いずれ返す。出世払いじゃ」

「おめエが出世するかよ」

鶴は応龍の言葉も聞かずに、文具店へと小走りに去っていくとする。が、途中ではたと立ち止まり、再び応龍の元へ戻ってくる。

「なんだ？ もう貸さねエぞ」

「蛇モドキ。礼を言うぞ。ありがとう。大儀じゃ」

礼を言った自分に満足したような笑顔をみせて、今度こそ去っていった。

それからも応龍は鶴の後をつけ、創聖学院まで帰っていくのを確認した。

創聖学院の正門まで出てきていた美冬を見つけた鶴は、小走りで近づき足下に抱きついた。

「美冬。言われたもの買ってきたぞ。千代紙じゃ」

「おかえり鶴。よく無事に戻ってきた」

「当たり前じゃ。わしは一人前じゃからな」

「そうだな。ところでなんだそれは？」

「これか？ これは駄菓子屋で買ったカエルのおもちやと、ビー玉とおはじきじゃ。飛行機は壊れた」

「そんなに買ったのか？」

「そうじゃ。わしは一人前じゃからな。これから出世もする」

「……？」

美冬と鶴が、校内に入っていくのを確認して、応龍は帰路についた。

夜、河合家の池でゆつたりと過ごしていると、アメリカが近寄ってくる気配を感じた。

「ヨリトモー。いるでしょ？」

応龍は素直に出ていった。出ていく理由があった。

「これ、お昼のお礼」

アメリカが酒を片手に持ってきたのがその理由だ。

「弁当つくるたびに酒もってきてたらワリに合わねえじゃねえのか？」

「ふっふっふ。これはあたしからのお礼と、みつふいーからのお礼でもあるんだ」

「……あの女か？ 童^{わらわ}が寄生している」

「ぬっちーを見張つてくれたんだって？ 礼と借りたお金を返したいって言ってたからさ。改まってお礼なんて言われると、ヨリトモはイヤがるからあたしからお酒でもあげておくよって言うておいたから。で、これはそのお酒」

「……酒は嫌いじゃない」

「そうでしょうとも」

わかったような顔をされて、応龍は顔をしかめる。だが酒瓶は素直に受け取った。

「ま、そういうことだから。ゆつくりやつてよ」

「おい、お前はこれ飲まないのか？」

「へ……もしかしてヨリトモ、あたしと一緒に飲もうって誘ってるの？ほんとに？」

「飲みたくねえならいいんだぞ」

「ううん、飲む飲む！ それじゃウチん中入ろ！」

誘われたことを無邪気に喜ぶアメリカを見て、ふと思ひ出す。

昨晚の出会いのこと……その時に話したことを……。

応龍は匂いに誘われて入った屋台で、酔っぱらい中年に絡まれた。

「ヨリトモ君、娘とはどういう関係なんだね？ ん？」

「……どうという関係もねえよ」

その中年はアメリカの父、河合玄造だった。

「職業は？ 定職を持ってない男とは付き合って欲しくないんだよ」

「付き合ってねえ」

「んん、反抗的だねえ。そういう態度、若い娘にはモテるんだろうねえ。私とてね昔はぶいぶい言わせてただけだね。ヨリトモ君も歳をとった時のこと、考えておいた方がいいよ」

「おめえより歳上だ」

これが絡み酒というやつかと、応龍はゲンナリする。玄造はずいぶんと酔いが回っていた。こんなのと話ながらでは酒もマズくなろうというもの。さっさと去るかと思った矢先、今度はその隣の中年が話かけてきた。

「玄造、ワシにも話をさせろ」

そいつは裕理の父、泉戸裕導だった。

玄造を端においやり、店の親父から貰ったコップ酒を手渡し、応龍の隣に座った。

「この店を知っているとは通だのお、兄ちゃん」

「たまたまだ。酒のいい匂いがしたからな」

「ワシらも同じだ。この親父、無愛想だが選ぶ酒はいいモノばかりだ」

と、店の親父に向かって言い、空いたコップをかける。そこに親父はなみなみと酒をついだ。
「ほれ、乾杯だ。一人で飲む酒もいいが、知った相手と飲む酒つてのはこうやって杯を交わすんだ」

言われるがまま、応龍は裕導とコップを合わせた。互いに一口、唇をしめらせた後、裕導が口を開く。

「ヨリトモくん、だったか？ それとも応龍と呼ぶといいかのう？」

「どっちでもいい。名前にこだわってるわけじゃねえ」

「なるほど。兄ちゃんにとって、名前は他者との繋がりというわけだ」

「……は？」

「いや、何でもない、忘れてくれ。独り言だ」

満足そうに酒を飲む裕導に、応龍は不審げな目を向ける。

忘れられるわけがない。そう簡単に忘れられない。応龍は景玄が名付け、綺久羅美守毘売が、その名をよく呼んでいた。ヨリトモはアメリカが呼び出したものだ。

そう思うと、裕導の言った『他者との繋がり』というのも言い得てると思えてくる。それが見透かされているようで、応龍は苛立った。だからここから去ろうと思い、金を置く。

「兄ちゃん……うちの息子らが迷惑をかけているのお……」

「……は？」

またこいつは何を言い出すんだと応龍は目を白黒させる。裕導はあまり酔ってないように見えるが、よく目をこらして状態を見ると、玄造と同じくらい酩酊していることに気づいた。

「うちのバカ息子と、ましろちゃんじゃよ。ましろちゃんも、うちのバカ息子と似て頭固いところあるから、迷惑かけてるであろう？」

「……………」

「ああ見えて、息子は妻の真理に似ててな。少々生真面目すぎるところがある。ましろちゃんはわいずもがなだ……」

「……わかってんなら、ちゃんと教育しろよ」

「あの二人が、ワシの教育なんて聞くタマか？ その辺は兄ちゃんもわかつとるだろう？」

そんなどうしようもないお手上げ状態なことを、裕導は笑顔で話す。それから親父に応龍の分の酒を用意させ、そのコップを応龍に差し出す。

「兄ちゃん。これから娘をよろしく頼む」

「……は？」

「ましろちゃんだ。あの子は思い詰めると一直線だからのう……親としては心配でならん」

「心配ならお前の息子もそうだろう？」

「息子は男だ。男はどうでもいい。その辺でのたれ死のうが知ったことか。だがましろちゃんは違う。この歳でできた二人目の娘だから可愛くてしょうがない」

「お前より歳上じゃねえか」

「歳なんて関係ない。あれはワシの娘だ。親が娘の心配をしないわけにはいかんだろうが」
「あいつは、太転依だぞ？ お前らとは違う」

「だから心配なんだ。その辺を分かってやれるのは同じ太転依の兄ちゃんだろうよ」
裕導は応龍の手を掴み、コップ酒を強引に持たせた。

「だから兄ちゃん、娘をよろしく頼む」

それから自分のコップを合わせ、美味しそうに飲み干す。

「ぶふあつ。美味しい酒だ。こういう酒が飲める時があるから、ハシゴは止められん」

「……この飲んだくれが」

無防備な中年の笑顔に、応龍は思わず苦笑する。

この時に飲み干した酒の味は、応龍にとっても格別だった。

河合家の応接間に通された応龍は、アメリカとグラスを合わせる。

「はいヨリトモ、グラス掲げて。かんぱうい」

「乾杯」

「お？ ヨリトモが乾杯なんて言うの始めてじゃない？」

「そうか？」

「そうよそうよ。いやー、ヨリトモも丸くなったね。出会った時はあんなだったのに」

「お前こそ、出会った時はあんなだったじゃねえか」

「そ、それは言わないでよ！ 禁止！」

恥ずかしそうに怒るアメリカを横目に、応龍は酒を飲む。昨日の夜ほどじゃないが、今夜の酒も美味いと応龍は思った。

「……悪くないな」

「は？ 何が？」

「お前らと馴れ合うつもりはねえが、酒が美味くなるンなら考えてやらんでもねえな」

「……へ？」

「何でもねえよ」

〈おわり〉